

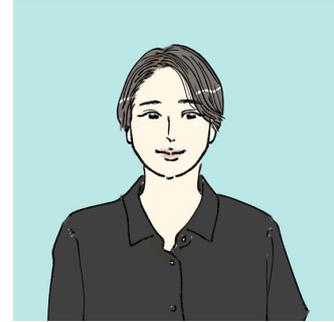
TOPICS : 鼻腔内腫瘍

新年のご挨拶

謹んで新春のお慶びを申し上げます。旧年中は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。本年も皆様の期待に応えられますよう、より一層尽力して参りますので、変わらぬご愛顧のほど宜しくお願い申し上げます。

■ はじめに

犬猫で発生する全腫瘍のうち、鼻腔内腫瘍の割合は決して多くはありません。ただし、現在は獣医療領域でもCTなどの高度な画像検査が普及し、弊社でもカテーテルや内視鏡を用いた鼻腔内生検の細胞診および組織診断を日常的に行っております。鼻腔内に発生する腫瘍にはポリープや過誤腫などの非腫瘍性の病変も存在しますが、腫瘍性病変の割合が圧倒的に多く、本号では犬猫における代表的な鼻腔内腫瘍についてご紹介いたします。



増田 真緒 DVM

■ 犬猫における鼻腔内腫瘍

鼻腔内腫瘍は一般的に高齢で発生しやすく、平均年齢は10歳とされています。ただし、犬では1歳未満で発生した例もあり、どの年齢でも起こり得ます。鼻腔内腫瘍は右の表に示すように上皮性腫瘍、間葉性腫瘍、円形細胞由来等のその他の腫瘍に分けられ、犬猫どちらにおいても約80~90%は悪性になりますが、腫瘍ごとの発生頻度には違いが見られます。犬では大部分が癌腫であり、次いで肉腫が発生しやすい一方で、猫ではリンパ腫が最も多く、癌腫は二番目になります。肉腫の中で軟骨肉腫はやや若い年齢（平均年齢7~8.7歳）で好発しやすいです。また、嗅神経芽細胞腫や神経内内分泌癌は他の腫瘍よりも高齢で発生しやすいとされていますが、報告例が少ないため、さらなる症例の蓄積による精査が必要とされます。

上皮性腫瘍	間葉性腫瘍	その他
<ul style="list-style-type: none">・乳頭腫・扁平上皮癌・移行癌・腺癌・腺房細胞癌・腺様嚢胞癌・腺扁平上皮癌・未分化癌(退形成癌)	<ul style="list-style-type: none">・軟骨腫 / 軟骨肉腫・線維腫 / 線維肉腫・骨肉腫・血管腫 / 血管肉腫・血管平滑筋腫・平滑筋肉腫・横紋筋腫 / 横紋筋肉腫・粘液肉腫・悪性間葉腫・筋上皮腫・未分化肉腫	<ul style="list-style-type: none">・嗅神経芽細胞腫・神経内分泌癌・末梢神経鞘腫瘍・副鼻腔髄膜腫・リンパ腫・肥満細胞腫・悪性線維性組織球腫・犬の伝染性性器腫瘍・悪性黒色腫

表.鼻腔および副鼻腔に発生する腫瘍



■ 癌腫（悪性上皮性腫瘍）

癌腫は、細胞診では円形～楕円形の細胞集塊が観察されます（図1）。細胞のN/C比は様々であり、とくに高分化な腺癌では過形成上皮との鑑別が困難なことがあるため、画像検査の情報と併せて総合的に判断する必要があります。腺癌は粘液基質が濃いピンク色に染まる細胞外基質が観察されることがあります。扁平上皮癌は分化段階の応じて様々な大きさおよび染色性の円形から角ばった細胞が観察されますが、濃い青紫色の細胞質や核周囲の透明化は扁平上皮に特徴的な所見と言えます（図2）。

腺癌

腺癌は鼻粘膜上皮や鼻腺に由来し、通常分泌物を含む腺腔構造の存在を特徴とします（図3）。様々な増殖形態を示しますが、多くは立方～円柱状の細胞が単層～多層性に並んで乳頭状や腺管状、腺房状に増殖します。細胞異型性も多様ですが、高悪性度のものほど腺腔は不規則あるいは乏しくなり、細胞には多形性や核異型がみられ、有糸分裂像も多くなります（図4）。

移行癌

移行癌は鼻腔吻側の扁平上皮と尾側の呼吸上皮との境界部にある移行上皮が由来とされています。立方～多面体の細胞が厚い細胞層を形成し、基底膜に対して細胞が垂直に並んだ柵状配列が特徴的です（図5）。しばしば細胞層内に蛋白物質や細胞残渣が貯留した小型な嚢胞を形成するため、腺癌との鑑別が困難になる場合もあります。

扁平上皮癌

鼻腔領域の扁平上皮癌は他の部位に発生するものと組織学的特徴は基本的には同じです（図6）。悪性度が増すほど細胞や核の異型の程度、有糸分裂像は増加します。扁平上皮癌と腺癌の両成分が混在している場合は腺扁平上皮癌という診断名になります。稀に扁平上皮化生を示す腺癌という診断名を使用することがありますが、これは扁平上皮成分が僅かな場合にのみ用います。

未分化癌

未分化型は円形ないし多形性を示す細胞が胞巣状や索状、瀰漫性に増殖し、腺細胞や扁平上皮など特定の分化を示しません。有糸分裂像は頻繁に観察されます。

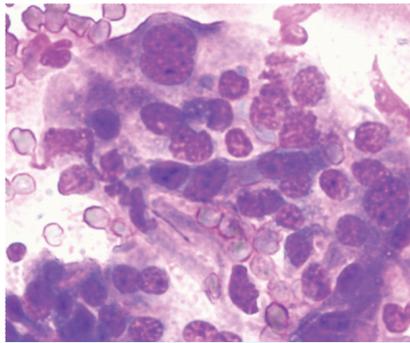


図1.癌腫の細胞像。上皮細胞が集塊状に採

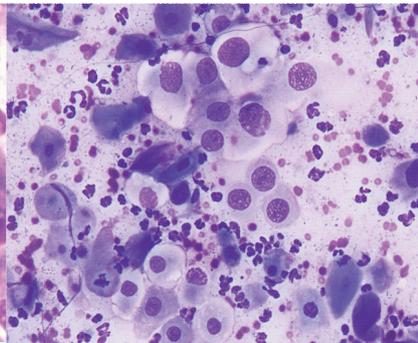


図2.扁平上皮癌の細胞像。細胞質は淡青取されており、核の大小不同がみられる。色～濃青紫色で、好中球も混在する。

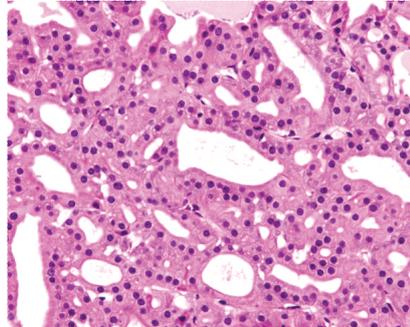


図3.腺癌（高分化型）の組織像。立方上皮

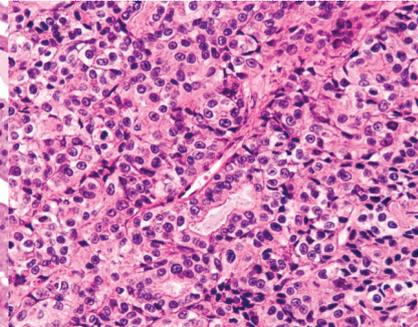


図4.腺癌（低分化型）の組織像。腺腔構造が腺腔構造を形成しながら増殖する。は少なく、N/C比の増大がみられる。

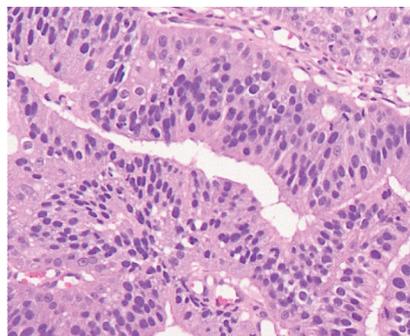


図5.移行癌の組織像。円柱状の細胞が基底膜に対して垂直に並び、柵状に配列する。

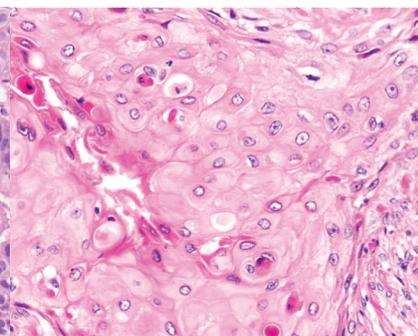


図6.扁平上皮癌の組織像。増殖巣中心部の細胞は角化を示し、同部の細胞は好酸性で広い細胞質を有する。

■ 肉腫（悪性間葉性腫瘍）

肉腫は、細胞診ではふっくらとした楕円形～紡錐形の細胞が観察されます（図7）。ただし、癌腫と比べて肉腫の細胞は容易に剥離しません。また、細胞診で紡錐形細胞が観察されたとしても、細胞数が少ない場合は反応性の線維増殖との鑑別が難しいため、とくに犬で生検をする際は上記のことを念頭に採材して頂くといいと思います。鼻腔内に発生する代表的な肉腫は骨肉腫や軟骨肉腫であり、細胞診ではこれらの細胞質は好塩基性でピンク色の顆粒を持つことがあります。粘液基質が濃いピンク色の細胞外基質として観察されることもあります。組織検査では紡錐形～多角形の細胞が類骨や軟骨基質を伴いながら増殖する所見を認めます（図8）

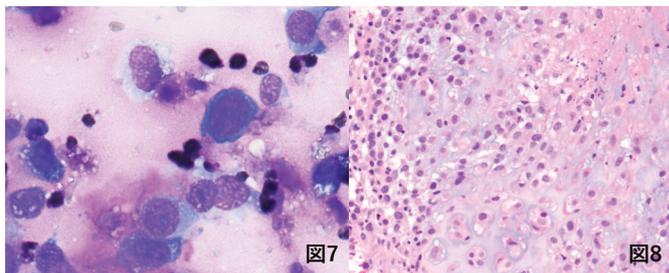


図7

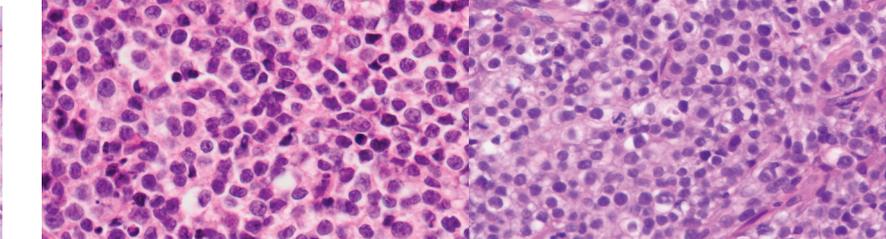


図8

■ リンパ腫

先に述べたように猫では鼻腔内リンパ腫の発生が多く、そのほとんどがB細胞性の高グレードリンパ腫になります。犬では稀ですが、低グレードおよび中間～高グレードいずれも発生があり、後者のリンパ腫ではB細胞性もT細胞性もともに報告があります。癌腫とリンパ腫ではその後の治療方針が異なってくるため、早期診断のため積極的に病理検査へ進むケースが多いと思います。細胞診では中型～大型の独立円形細胞が観察され、細胞は大型な円形核と青紫色に染まる比較的狭い細胞質を有します。核クロマチンは微細で、1個～複数の核小体を認めることがあります。組織検査においても典型的な症例では診断は難しくありませんが、腺腔構造の乏しい高悪性度の腺癌や未分化癌との鑑別が困難な場合もあり（図9、図10）、このような場合は免疫染色による精査が必要になってきます。

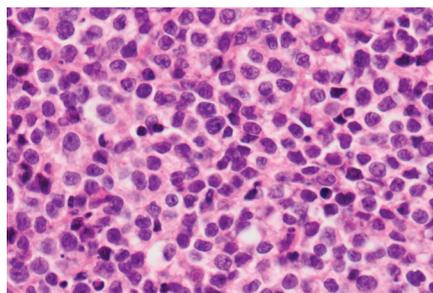


図9.大細胞性リンパ腫の組織像。

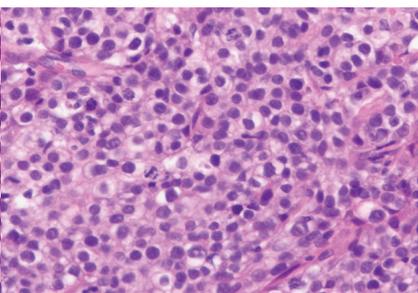


図10.未分化癌の織像。



過去のニュース



アンケート

ホームページにて過去のセルコバニュースを配信しています。【パスワード：SZ-news】
また、今後、取り上げてもらいたい病理トピックを募集しています。
（右側QRコードからメール送信をお願いいたします。ご応募お待ちしております。）